

---

# 焼き芋 + 無双

鉄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

焼き芋十無双

### 【Zマーク】

Z2766Q

### 【作者名】

鉢

### 【あらすじ】

テンプレのように神様の手違いで死んでしまった主人公は、これまたテンプレのように神様からアイテムを貰い第一の生を開始する。そのアイテムとは、まあチートといえばチートかな？

## ■話（前書き）

作者迷走中、就活やらのストレスで書きなぐったものです。お付き合い頂けたら嬉しいです。更新は、まあボチボチがんばります。

俺の名前は一ノ瀬陽太、じゃない大学生だった俺は今後漢の時代にいてそこで、

「お、焼けた」

焼き芋を作っていた。

焼き芋十無双

零話『神様のくれたチートアイテム』

最初から説明するとなんというかテンプレだろうか。四柱の神様の手違いによつて死んでしまつた俺はその侘びとして新しい世界で第一の生を送ることになつた。行先は恋姫十無双の世界、普通に死亡率が高い世界である。主要キャラは死なないが一般兵はガンガン死ぬ、まあ戦乱の世なんだから仕方ないと言えば仕方ないが一般ピープルの俺では野党に襲われただけで死ねる。神様のほうもそれはわかつっていたのか俺にアイテムをくれるらしい、しかもチート級というお墨付き、中二病が再発しかけた俺にまず麦わら帽子をかぶつ

た神様が近づいてきた。

「僕は植物を司る神だ、お前にこれを授けよう

そう言つて手渡されたのは30センチ程の植物、……あ、これサツマイモの苗だ（実家が農家）。呆然としている俺に次はガタイのいい木槌を持った神様が近づいてきた。

「俺様は工作の神だ。お前にはこいつをくれてやる」

渡されたのは紙とペン、これでいつたいどうしようと聞いかけようとしたら三番田の神、メガネをかけたインテリ風の女性が近づいてきた。

「私は知識の神、そなたに知識を与えるようと思うのだが人の身では私の知識の量に耐え切れない、よってこれを送る」

そう言つた途端ポケットから光が溢れる、手を突っ込んでみると光つっていたのは俺の携帯電話だった。もう何が何だかわからない俺の

もとに最後の神様、様々な衣服を着た神様が近づいてきた。

「全く、結局誰も彼に生き残る術を『覚えていない』ではないか。私は衣の神、君にはこれを『覚えよ』」

そう言って帽子を渡してくる神様、いやいやこれでいいだうじろ言つのだろうか、ていうかそのほかの神様も貰つた物の使い方が今一わからんのだが。それを訊こうとすると、

「やあそろ時間」

「む、そりじゃな。では坊主、行つてこい」

「アイテムの使い方は追つて連絡しよう」

「がんばつなよ」

その言葉を最後に遠のいていく意識、次に気が付いたとき俺は山の中にいたというわけだ。

さて、ここで神様たちのくれたアイテムの説明をしよう。

### アイテム1：サツマイモ（時金）の苗

名前の通りサツマイモの苗だ、もちろんただの苗ではなく地面に植えて一晩たつと芋ができるというものだ。サツマイモは繁殖能力が非常に高いので一回で3・4個採れれば正にチートだろう、多分きっと。

### アイテム2：無くならない紙とペン

これも名前の通りいくら使つてもなくならないペンといいくら破いたらしくても元通りに再生する紙（A3）である。紙の再生というのは例えば一つ折りにして破いた場合A4の紙が2枚になる。しかしこの神の場合は片方が元に戻りA4が1枚、A3が1枚になるのだ。まあこれはこれでいい物だろう、時代的に見てもいいものだ。

### アイテム3：wikipedia

正確にはwikipediaに接続できる携帯電話だ。どうこう原理かは知らないがこの恋姫世界においても俺の携帯はwikipediaに接続できるよつだ。ただしそれ以外の通信は全くできず

Wikipediaにも接続できるだけだ、十分だけね。ちなみにバッテリーについては手巻き式の発電機が付いていた。

#### アイテム4：無縁帽子

なんか設定したこととかぶつている間無縁になる帽子、『病』と設定するとかぶつている間病気にならず『戦』と入れると戦から無縁になる。なんか一番ファンタジーの詰まつたアイテムだ。

さて、アイテムの確認が終わつたところで俺がまずやつたのはそれ以外の所持品の確認である。コンビニに向かう途中で死んだ俺の持ち物なんてたかが知れてるが幸いなことにライターが見つかった。煙草をたまに吸うのでそれ用の安いライターだが今はありがたい、さつそく俺は紙を破り薪や葉っぱを集めてたき火をする。ついでに芋の苗を植えてこれからどうしようかを考える。この世界で俺は文無し宿無し縁無しと無い尽くしだ。主人公の北郷一刀のように神の御使いとかはできるとは思えないしそもそも死にたくない、とりあえずその日は帽子に『危険』と設定し被る。これで危険とは無縁になるはずなので俺はそのまま眠りについた。明日から一体どうしよう。

一話（前書き）

口調がいまいちでヤンス

寒が厳しくなつたある今日の頃（一ノ瀬君の世界は12月）、皆様いかがお過ごしでしょうか。早速だが今の俺は困っていた、それも見ず知らずの世界云々ではなくもつと単純なことだ。

「ひっく、おがあやあ～ん」

「ああ、よじよじ」

といつあえずあれだ、ビーハーハーハなつた。

一話『迷子と母と』

さて、いつなつた経緯を説明するには時間を少々戻す必要がある。昨夜森の中で一晩過ごした俺はとりあえず人のいるところを田指したわけだ。幸い南にいつてすぐの場所に街があった、俺はその街に入りいろいろとぶらついていた。まず資金をどうにかしないというわけなんだが俺の持っているものの中で売れそうなものと言つたら

紙と芋くらいである。しかし相場はわからないしそもそも売るためにはどうすればいいのかもわからない。どうしたものかと頭を搔いたところで腹が鳴り朝作った焼き芋の残りに手を伸ばし、

「ひつぐ、えつぐ」

その子を発見したというわけだ。

女の子の名前は璃々ちゃんというらしく母親と買い物に来たのだが人ごみの中ではぐれてしまつたらしい。必死に宥めとりあえず芋を半分に割つて渡す、甘いよ~おいしいよ~となんとか食べさせることに成功し芋の甘さが気に入ったのか何とか笑顔になるその隙に話を聞くことに成功したのだった。

「はむはむ」

「しつかしつかしたものか、じついう時は警邏の人とかに預けたほうがいいか?」

まあ当然と言えば当然だ、このままでは下手をしたら誘拐犯などに間違えられるかもしない。その前に預けてしまおうと周りを見渡

し

「く？」

顔面に強い衝撃を受け俺の意識は闇に沈んだ。

沈んでいた意識が浮上していく、それを引き起こしたのは酷い痛みだった。ズキズキと断続的に続く痛みに思わず顔をしかめそのせいでさらに痛みが酷くなる。目を開ければそこには知らない天井があり寝台の上に俺はいた。体の節々が痛むが骨が折れたといった感じではなく全身打撲といつたところか。しかし、ここはいつたいどこのだろ？

「・・・・！」

ん？

と、扉越し声が聞こえる。何やら怒鳴っているようだが内容まではわからない、痛む体を引きずつて扉まで歩き開ける。そして俺の目に飛び込んできたのは、

「全く、どうして貴方はそう突っ走るの？ 璃々を助けてくれた人を人攫いと間違えるだけじゃなく殴り飛ばすなんて、幸い大した怪我はありませんでしたけど下手をしたら死んでいましたよ」

「うう、だからそれはすいませんでしたってば。大体紫苑さまだけかなり慌ててたじやないですか」

「娘がいなくなつて慌てるのは当たり前です、第一慌てていたからと言つていきなり人を殴り飛ばしません」

そこには一人の女性、床に正座している黒髪に一部白が混ざつた若い女性と紫色の髪の妙齢の女性だ、確か魏延と黄忠だつたかな？ そんなことを考へていると黄忠（仮）さんがこちらに気付いたのか魏延（仮）さんとの話を止めてこちらを向いた。

「あら、お田覚めでしたか。体のほうは大丈夫ですか？」

「少し痛みますがこれといった不調はないですね、骨も折れていな  
いようですし」

「それはよかつた、焰耶」

「う、わ、悪かったよ。いきなり殴つたりして

黄忠（仮）さんに促されて俺に頭を下げる魏延（仮）さん、そ  
ういえば記憶に残る最後に聞いた声はこの人の声だ。……よく生きて  
たな俺。

「えつと」

「ああ、失礼いたしました。私は姓を黄、名を忠、字を漢升と申し  
ます」

「私は姓を魏、名を延、字は文長だ。その、本当にすまなかつた」

「えっと、魏延殿？ 別に気にしてませんよ、怪我も大したことないみたいですし」

そう頭を搔きながら頭を下げる魏延さんと言つ。 実際のところ自分でも下手したら誘拐犯に間違えられるんじゃないかとも思つていたしな。 最も、魏延さんも譲らず話が平行線に入ったところで黄忠さんに止められる。迫力が半端じゃなく魏延さんとそろつて首を縦に振つたほどだ。

その後、傷が癒えるまで黄忠さんの家で厄介になることになった、遠慮しようとしたのだが無言の圧力に負け頷いた。 次に俺の素性を聞いてきたのだがここで俺はどうこたえるか迷つ。 馬鹿正直に言つたところで信じてくれるか微妙だし仮に信じたとしても天とかそんなのははじめんだ、なので、

「自分はここから遠い国から旅をしてきたんだ、旅の理由についてはちょっとややこしいから省くけどまあこの街にたどり着いて璃々ちゃんに会つて今に至るつてとこかな」

因みに璃々ちゃんの名前についてだがこれは幼名らしい、真名じやないのかと思ったが璃々ちゃんはまだ真名を貰っていないらしい。まあそうでもないと出会つていきなり真名を言つわけないんだが。

とりあえず旅人と言つたはいい物の不審点はかなりある、まず第一に旅人なのに武器の一つも持っていないことだ、帽子があるからいらないと言えばいらないのだが他人から見れば怪しいだろう、徒手で戦うといつもあるがそれでも樂進のよう手甲をつけるのが普通だろう。第二に所持品である、ライターに財布、携帯電話に発電機、紙とペンに芋の苗に帽子、見事に統一感がない。他にもあるが今はこの一つが重点的に怪しい、さてどうしたものかと考えていると、

「そうですか、わかりました」

「あの子を助けてくれようとしてくれた人なら悪い人ではないでしょう、仮に違つたとしてもこの家にいる限りは好き勝手できませんでしょ?」

そう微笑む黄忠さんはかなり怖かつたですはい。

さて、黄家に間借りすることになつた俺だがこの間に色々と決めよつと思つ。一つは金、もう一つは今後の身の振り方だ。金のほうは芋や紙を売れば手に入ると思うんだが肝心の売る方法がわからない、店を出したり持ち込んだりするにしても相場が分からぬから

どうにも手を出しづらい、黄忠さんに頼むにも出所が不明の者なんて迷惑になるだら、本当のことを話すのも手だがそれは最後の手段にしたい。次に身の振り方だ、wikiがあるからここに乗つて情報をもとにどこかに住み着くいがこれを奪われたら終わりだし当てもなく旅をするのも遠慮したいところだ。

手詰まりな感じがするのでここは別のことを考えることにする、それというのもこのアイテムについてだ。昨晩は簡単にしか確認していないかったので何か見落としがあるかもしれない、特に帽子については『危険』と設定していたにもかかわらず魏延さんに殴り飛ばされたことを考えるとまだまだ制約はあるようだ。そういうわけなので各アイテムの効果を改めて調べるにした。結果、

### 芋の苗

効果：地面に植えて一晩で作物を収穫できる苗、田没から田の出の間に成長し植えた時間により収穫量が変化する。

### 無くならない紙

効果：どんなことが起こっても再生する紙、切っても燃やしても元に戻る。切り離した紙は普通の紙となるが再生する方の紙の基準とかは不明。

### いくらでも書けるペン

効果：インクの無くならないボールペン。

## 携帯電話

効果：Wi-Fiに接続できる、ふつうの携帯としての機能も使える。

## 無縁帽子

効果：被っている間設定した文字と無縁になる。字数によつて効果時間は変動し字数が少ないほど効果は長く続く。

ところどだ。つまり魏延さんのあれば帽子の効果が薄れていたといふことだらうか。だから殴られはしたが打ち身ですんだといふことだらう、多分きっと。

間借りすること数日、郷も今後の予定を立てよつと頭をひねつていると黄忠さんが現れた。まあこの人の家なのだから当然といえば当然なのだが問題はその表情だ。

「食餓、ですか？」

「はい、この益州全土で食餓が起きています」

食餓ねえ、そんのは本編にはなかつたよな？　あくまで恋姫つぽい世界つてことかな？しかし参つたな、食餓つてことは当然飢え死にする人間が多数出るだろ。いや、あの芋を配れば多少は何とかなるか？　幸いといふかここに間借りするよつになつてからも苗は植えてる、ていうか初日に植えてそのままだ、今なら大量の芋が収穫できるもしけない。しかしそれは芋の出所も話す必要がある、面倒い」とは「めんだ、ごめんだが……仕方ないか。

「黄忠さん、ちょっと来てくれる？」

「？」

首を傾げる黄忠さんを伴いやつてきたのは街の外、そこには芋の苗が植えられておりこのしたには大量の芋があるはずだ。

「見ただけでなにを？」

「見てればわかるよ」

そう言ひ苗を引っ張る、ズルズルと地中から芋が次々と顔を出して  
いく、その光景を目を丸くしてみている黄忠さんを尻目に芋はざん  
どん出てきて100を越えたあたりで数えるのをやめた。

「足りないことは思つけど一先ず」これを配つて「ださ」、出所は内密  
にお願いします」

「一々瀬さん、貴女は一体」

「それは後ほど、今は飢餓に対するほつが先決かと」

「そうじうと黄忠さんの目が鋭くなつたが次の瞬間にはいつもの黄忠  
さんに戻つた。」

あの後、黄忠さんは街から兵士を引きつれて芋を運んでいった。兵士達も芋の山に唖然としつつも黄忠さんの命令どおり芋を運んでいった。その夜、俺は黄忠さんと向かい合つて座っていた、理由はもちろんあの芋のことだ。

「まずはお礼を、あれだけの食料を感謝いたします」

「構いませんよ、どうせ皿も満足ですか？」

「そうだとしてもそれで救われる人がいるのも事実です。ですが、それは別にしてもあなたには聞きたいことがあります」

「どうしちゃうね、何でも聞いてください。今なら何でも答えますよ？」

なんかもつ隠し事をするのがめんどくなつてきた、といつが良く考えたら一人くらいは協力者は必要だと思つ。まあ、もしものために帽子に『危険』と入れてるからこそのつたら逃げるけど。

・

「お話を聞かせて」

「どういたしまして」

「要所要所を量しつつ俺は黄忠さんに事のあらましを告げる、最初は疑っていた黄忠さんだが紙や帽子の機能を見せると納得してくれた。

「俄かには信じられません、しかし神の奇跡といつ物を見てしまつた以上信じないわけにはいきません」

「それほどいりも」

「しかし何故それを私に?」

「何故、ねえ。言つたでしようただの自己満足つて、そのためには協力してくれる人が必要なんですよ」

「これはただの自己満足、偽善だ。それでも、目の前に餓えている人がいて俺の手には余るほどの食料がある。そこでその食料を分けたつていいじゃないか。」

「俺には益州の餓饉を和らげる物があり黄忠さんは俺の隠れ蓑になる、持ちつ持たれつの関係で行きたいんですよ」

「……わかりました、協力しましょ。いえ、協力をお願ひいたします」

「お願いされます。それじゃまず始めに……」

「この年、益州全土を襲つた餓饉による餓死者は当初予測された数よりもかなり少なく収束した、その影には益州唯一の太守の尽

力があるとそれでいたがその更に下、この飢饉における最大の功労者の存在はどの歴史書にも記されずただ黄忠自身が書いたとされる日記の一文にのみその存在は記されていた。

一話（後書き）

さつまいもは飢餓対策の作物だ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2766q/>

---

焼き芋†無双

2011年1月26日04時39分発行